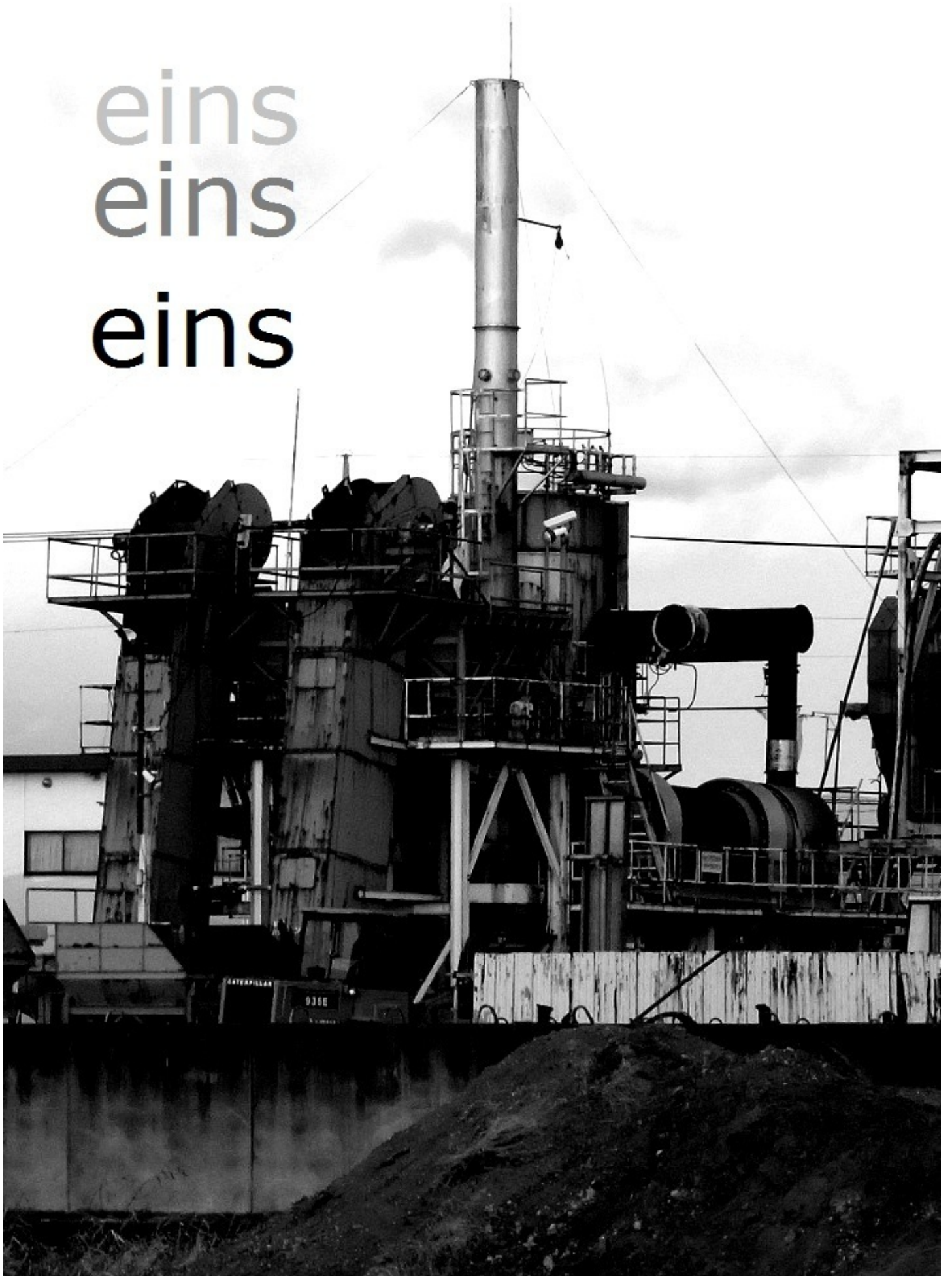


eins  
eins  
eins



葛城三佐にカーペットを汚してしまったことをお詫びしなければなりません。  
私はもう壊れてしまうと思うので、この手紙を葛城三佐に委ねます。  
すべてが終わったら、この手紙を碓シンジさんへお渡しください。

碓シンジ様へ

いつからか、貴方の事を思わずにいられないようになっていました。

愛しています。

けれど、私が今日筆をとったのは思いを告げるためではないのです。

それに、この感情はただ愛しているというだけでは無い、と私自身には感じられるのです。

九月の終わり、私達が出会った日の事を覚えていますか。

あの日が私の初めての使徒戦となりました。

もちろん、貴方と共にです。

※

独逸では様々な事がありました。母も、父も、私を本当に愛してくれていました。けれど、ある日を境に、母は私の事を見られなくなってしまいました。それまでの幸せな日々の代償でしょうか、彼女は人形を私と思い込んでいるようでした。

私の努力が足らなかったからでしょうか。

私や母が、神の意志に背く事をしてしまったのでしょうか。そして、父もすっかり変わってしまいました。

私にとって、失った物はあまりにも大きすぎました。

—ただ見て欲しかったのです。他の誰でもなく、私を。それがいけなかったのでしょうか。傲慢な考えだったのでしょうか。いいえ、きっと私の努力が足らなかったのです。だから私は、もっと努力しなければならない。

そして、他人や母に、そして父に、私の存在を認めてもらわなければならない。そう考えて、これまで生きてきました。やがて、努力が報われる時がやってきたのです。これできっと母に、他人に、皆に、認めてもらえる。心を踊らせて母の居室へ駆けてゆきました。

しかし、それは遅すぎたのです。

その時すでに、母は神と共にあられ、この世から旅立って行ったのでした。

いかに幸せに見える家族でも、時の流れの前には何も出来なかったのです。  
人の感情や命は、不変ではないのです。  
母は死に、父は私のもとから去りました。

変わらぬ愛が、価値が欲しいのです。

努力しても、認めてくれる親はもういませんでした。  
だから、自分を自分で認めてかなければならないのです。  
そのためにはやはり努力が、努力と経験という変わらぬ物が、必要なのです。  
私はその日からも、努力を怠ったことありません。

自我というのは、自分で決めて、自分の力で支えなければならないのです。

しばらくしてある先輩と親しくさせて頂くようになりました。  
恋慕というより憧れだったかも知れません。  
あの方は私に様々なことを教えてくださいました。  
力を抜いて一歩下がって全体を見てみることに、人に頼ってみることに。けれどそれは私の誇りが許すわけはありませんでした。  
それにあの方は、私を子供扱いするばかりで私自身を見てくれなかったのです。  
私自身を独立した個性として認めてくださらなかったのです。  
恐ろしいことに私は他人に認められたいと思い始めていたのかもしれない。

※

独逸でも貴方の事は伺っておりました。

そして、日本へ向かう艦の中で私は耳を疑う噂を耳にしました。

—日本にいるサード・チルドレンは訓練なしで使徒に挑み、そのシンクロ率は実に40%を記録した。

これはどういう事なのでしょうか。私には理解できませんでした。

いやしかし、この噂は何かの間違いかも知れない。

自分の目で確かめてさえいないのに、これ事実として受け止め、心を痛める必要はない。

事実でないとしても、この噂はなんということでしょう。

きっとサード・チルドレンはこういった噂の立つほど、才能に満ち溢れている人なのだろうと、私は期待をしていました。

ですが実際には違いました。普通の少年。正直に言うなら、私の嫌いなタイプ。

なぜこんな少年にあのような噂が立っていたのか、私の目で、確かめなければなりません。

そう考えていた時、使徒がやってきたのです。あのような時に使徒が来襲したのは実に不可解な事です。

しかし私は妙に納得をし、対使徒戦に胸を踊らせていました。

初めての戦闘にあたり、私は、

彼の実力のない事を確認するだけでなく私の才能を認めさせることもできるかも知れない、と考えていました。

ですがどうでしょう、結果は使徒殲滅、認めたくはありませんでしたが、貴方の力に依るものも大きかったのは私にも分かりました。

この事実が血の涙の出るほど努力をしてきた私に、この私に、どれほど深い傷を負わせたか、貴方には理解できますか。

きっと理解出来ないでしょうね。

私は努力しない人間を認めたくはないのです。けれど私は、貴方に数字の上で負けたのです。そして、いつのまにか自分でも意識しないうちに、わたしは貴方を認めていたのです。

私がエヴァのパイロットだから、私は私自身を認められるのです。だから、同じくエヴァのパイロットである貴方を認めることは当然の事なのかもしれません。しかし、それは私には許せなかったのです。

私がこれまで積み上げてきた物が、再び、貴方によって壊されていく気がしました。

これまでの努力は何だったのでしょうか。

いや、私が努力と呼んでいた物はもしかしたら努力ではないのかも知れません。

私はどうすればいいのでしょうか、私は、私は一。

貴方はなんと憎い人なのでしょう。貴方のせいで、私は築きつつあった自我を失いつつありました。

同時に私は自分の弱さに気づいてしまいました。

私は一人で生きてきたような顔をして、努力したつもりで自分を騙し、他人にいい所を見せその支えとしていたのです。

そして悪いことに貴方は私の命の恩人なのです。

貴方は私の何が憎くてそのように私の自尊心を虐めるですか。

いえ、優しさなのでしょうね。貴方の。

私はこんなに貴方が憎いのに、

嗚呼、私は憧れさえ抱いているです。

貴方に認めてもらいたい、私を受け入れてもらいたい、私を包みこんでもらいたい、私を、私を  
―― - ...

貴方はそれから使徒に勝っていきました。私とは対照的に。  
貴方は使徒に勝ったというのにあまり嬉しそうではありませんでしたね。  
私は、そんな貴方を憎むことしかできなくなっていました。

貴方は弱い人でした。私も弱い人間です。  
似ていたのです。  
私は貴方を直視することができませんでした。 貴方はきっと愛に飢えていたのです。  
愛をくれる人物ならすぐそばにいたのに。  
でも、貴方は私を見ようとはしませんでした。  
だからそのことに気付けなかったのです。

貴方にもやはり弱いところや欠けたところはあるのですね。  
私と同じ弱いところ、欠けたところを。  
貴方は私とは違い、人に頼るという事をしようとする。  
私は貴方と違い、人には頼らない。

貴方は私に独逸のあの方の死を伝えた。  
私には、頼ろうとしても、頼れる人が居なくなってしまった事を知りました。  
私を支える過去が消え去ろうとしていました。

一方、貴方は、この私に頼ろうとしてきました。  
ですが、そんな貴方の思いを私は拒否してしまいました。  
貴方を憎んでいたからです。

私は素直になれなただけなのです。愛して欲しかったのです。

私はせめて人間らしく、生きていこうと思っていましたが、それは叶わないようです。  
貴方のせいです。

私は、自分だけでなく他人を認め、共に行きていこうと思っていましたが、それは愛と呼ぶことを知りました。

貴方に出会えたからです。



惣流・A・ラングレー